

## 亡き人と共に

また、今年もお盆の季節がやってまいりました。毎年のことながら、家族そろって、お墓参りなど、ご先祖を偲ぶ日本人の美しい習慣なのかもしれませんね。近頃はさつさとお盆参りをすまして、後はゆつくりと遊び歩くようなこともよく行われているようですが・・・

そこには、亡き人はいません。それどころか亡き人との関係を断ち切るようなことを平気でされる方も数多くおられます。死者を忌まわしいもの、不吉なものとして排除しようというのです。

塩をまいたり、故人の茶わんを割ったり、屏風を逆さにしたり、普段とは逆のことをしようとしたりします。これは死者を忌み嫌い、不浄なものとして避けることからきています。死は吉凶とか浄、不浄とかで語るものではありません。死は自然の摂理として受け止めていくべきなのです。

私たちの迷いとは、その摂理を素直に受け止められないところから、来ているのです。一九一二年イギリスの豪華客船タイタニック号は処女航海の途中氷山に激突して千五百人の死者

をだす史上最大の海難事故を起こしました。映画でも、小説でも、悲劇のドラマとして語り継がれています。NHKで数年前に放映された「タイタニック 極限の人間ドラマ」では次のよう

なことが語られています。《タイタニック号は深夜に突然氷山に激突して大きな爆発と共に沈没

した。その時に救命ボートには子供や、女性を優先して乗せた。救命ボートは助けられるまでその場に居合わせた。そのためにボートに乗っている人々は船と共に沈んでいく夫や父親の苦しみ

ながら死んでいく声をなすすべもなく聞き続けなければならなかった。引き上げられた遺体の検死結果によれば死因は凍死か、窒息死だった。窒息と言っても溺死ではない、寒いために喉だけ

で呼吸しようとしたからだだった。船から飛び降りて泳いでボートに乗った人々も殆どが寒さのために凍え死んでしまった。夜明けと共にカルパチア号に救助されようやくその場を離れることが

出来た。しかし苦しみながら死んでいった夫や父親のうめき声は生涯忘れることがなかった。自分だけが助かった事、夫や父親を助ける事が出来なかった罪悪感は、生涯助かった人たちを苦

しめることになったのである。》そうしてこの番組では最後に次のようにまとめています。「亡くなった人たちを語り継いでいくことは、亡くなった人たちに敬意をはらうことである」過去を、

いや亡くなった人を忘れずに生きることが過去の苦しみを和らげ現在を生きる力につながっているという事です。死者を葬るとか、忘れるのではなく「死者とともに生きる」ことを学ぶこと

が、今の私の生きる原動力にはなってはきませんでしょうか。私が今生きている事がどれだけの「死」の犠牲の上に成立しているか、いや生きていることは罪を造り続けているということ、

その事を知っていても、知らぬふりをしてごまかし続けている私。亡き人と語ってみませんか。亡き人と歌ってみませんか。平生忙がしいと言い訳し、忘れ去られている亡き人の声に今年のお盆

はそつと耳を傾けてみませんか。